

## 円筒埴輪



▶ 円筒埴輪  
◀ 形象埴輪(人物)  
▼ 形象埴輪(馬)

※いずれも穴塚古墳群6号墳出土



皆さんは「埴輪」という名前を聞いたことがありますか。ちよつと考古学に詳しい方だと人物や馬などの形をした「形象埴輪」を思い浮かべるかもしれません。でも今回は、もう一種類の土管のような形をした「円筒埴輪」の話します。

埴輪は、古墳時代の豪族の墓である古墳に立て並べられたもので、円筒埴輪は古墳時代の初め頃に、古墳のまつりで使用されていた壺形土器と、それを乗せていた器台形土器が変化して生まれたものと考えられています。円筒埴輪は、古墳の周囲や豪族の遺体を埋めた埋葬部などを、取り囲むように並べられている状況が発掘調査で見られていることから、古墳の神聖な区域を示すために並べられたものと考えられています。この古墳に円筒埴輪を並べるといふ風習は、近畿地方では4世紀後半頃から始まり、近畿地方から東北地方にかけて、5世紀半ばから見られるようになり、古墳時代後期の6世紀には大変盛んになります。7世紀には全国的に見られなくなるようになります。

ところで、埴輪を古墳の周りに並べようとすると、古墳の大きさにもよりますが、一つの古墳を作るだけでも非常にたくさんの数の埴輪を用意する必要があります。そのため埴輪は、専門の職人が、

集団で短期間のうちにたくさん生産できる工場のような場所があり、そこから各地の古墳に運ばれて使われたものと考えられています。穴塚古墳群から出土した円筒埴輪を観察してみると、高さ約50cmくらいで上のほうが広がった円筒形をしており、胴体の外側には縦方向にハケ目と呼ばれる串状の工具のあとが全体に付けられた上に、タガと呼ばれる凸帯が3段貼り付けられ、丸い透かし穴がタガによって区画された中段に、対面して2個ずつ計4個あけられています。このような形態は、県内の6世紀後半の円筒埴輪に共通する特徴で、いかにも一つの見本を元に生産されたような強い規格性が見受けられます。

また、外から見えない埴輪の内側は、積み上げられた粘土ひもがそのまま残されているものもあるなど、製作にあたっては、できるだけ手間を掛けないようにしたこともうかがえます。県内では茨城町小幡とひたちなか市馬渡で古墳時代後期の埴輪製作遺跡が発見されていますが、使われている粘土の特徴から見ると、このほか霞ヶ浦沿岸地域にも、埴輪を集中的に作っていた場所があったと思われる。

現在、上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館で開催している企画展「上高津貝塚の歴史的環境」では、穴塚小学校内古墳から出土した円筒埴輪や穴塚古墳群から出土した形象埴輪・円筒埴輪を展示しています。よく観察してみましょう。

岡考古資料館 ☎826・7111

